紫金草に秘められた故事

「紫金草」という花をご存知ですか。紫金草とは、３～４月ごろに畑や土手で紫色の十文字の花をつけるナタネ科の菜の花です。一般に「ムラサキハナダイコン」とよばれています。この花が別名「紫金草」と呼ばれるのは、つぎのような話があるのです。

1931 年、日本は中国東北地方（満州）への侵略戦争を開始し、これを皮切りにつぎつぎに戦争を拡大して、1937 年には当時の首都南京を制圧し、３０万人（中国公式見解）の大虐殺を行いました。当時、日本軍の衛生材料廠々長で薬学者であった山口誠太郎氏は、日本帰国への際、南京大虐殺が行われた紫金山の麓に咲いていた紫の菜の花の種をとり、密かに日本に持ち帰りました。

そして、戦争で命を奪われた人びとへの鎮魂と贖罪をこめて、この花を「紫金草」と名付けて茨城県の自宅の庭で種を増やし、家族や協力者とともに、この花を日本中に広げていきました。1986 年の筑波万博では 100 万袋の紫金草の種が配布されました。こうしていまでは、「ムラサキハナダイコン」などの名で呼ばれ全国で見られるようになりました。

その後、この故事に基づいて絵本「紫花だいこん」がかかれ、さらにそれをもとに合唱朗読構成「紫金草物語」が作詞作曲されました。この曲は東京足立区で、1998 年に初演され、いまではこの「紫金草物語」を専門に歌う「紫金草合唱団」が設立。団員は 400 人に達しました。今日この曲を歌う他団体の参加者を含めて約 1000 人が、各地で演奏活動を展開しています。

南京、北京で演奏された「紫金草物語」

この紫金草合唱団は 2001 年に南京と北京を訪問し、2003 年、2004 年と引続き南京、北京を訪れて演奏し、交流と友好を深めています。

日本との交流を担当している、中国南京市外事弁公室の孫曼さんは、「紫金草合唱団」の南京での初めての公演の印象をつぎのように語っています。

「公演前は正直にいって、南京市民がどんな反応を示すかが少し不安でした。しかし、この組曲を聞いた千人の会場は大きな拍手と感動の涙に溢れていました。観客の感想には、『歴史を変えようとする危ない日本の社会の中で、良心を持って歴史を正視しようとする皆様の態度と勇気に大変感動しました。』『日本には良心のある人も大勢いて歴史を認めないのは、ごく一部の人だということがよく分った』。コンサートを聞いた南京市民の誰もが、私と同じように日本と日本人に好感を持って、日本との友好を願うようになりました。」

4月に南京公演 ― 男声合唱団「昴」

「紫金草合唱団」が開いた「南京理工大学との日中文化交流」は、第１回目に２００７年、日本のうたごえ奈良祭典での南京理工大学による「龍の踊り」。翌 2008 年の第２回には「日本のうたごえ合唱団」による同大学公演へと続き、第３回目の今年は男声合唱団「昴」が、同大学で「人間の尊厳をうたう」コンサートを開くことになりました。

日程は、４月 17 日～21 日までで、南京市民合唱団「江蘇省鐘声合唱団」との交流、「南京大虐殺記念館」見学、秦の始皇帝時代の郵便事業跡で明清代の家並が残る「高郵」訪問。さらに 23 日までの延泊コースは奇岩奇峰の世界遺産「張家界」散策なども含まれる〝友好と音楽の旅〟です。この旅行に同行される方をいま募っています。お問合せは右記男声合唱団「昴」まで。

紫金草（ムラサキハナダイコン）

＊男声合唱団《昴》連絡先
立川孝信（090-6058-5652）
本並美徳（090-9270-2971）